

シラバス参照

科目名	緩和医療学
配当年次	4年次
開講期間	秋学期
単位数	2
担当教員	細谷 治(ホソヤ オサム)
期間・曜日・時限・教室	秋学期 金曜日 3時限 18－102

※	選択科目
授業の目的・目標	(1)授業の概要:痛みとそのマネジメントの理解を通して、緩和医療にかかわる他職種の考え方、患者への対応、薬剤師や管理栄養士に求められることやかわりなどを学び、どのような役割を担うのかを考える。専門職連携教育(IPE)の手法を取り入れ、症例を通して自分の意見をまとめる。 (2)授業の目的・目標:がんをはじめとする生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族のQOLの向上を目指し、痛みやその他の身体的、心理社会的な問題を理解し、緩和ケアに関わる薬剤師および管理栄養士としての確かなアセスメントを実施し、有効性と安全性の両側面から治療に貢献できる能力を身につける。また、死を正しく理解し医療人として、死生観についても考えられるようになる。さらに専門職連携教育(IPE)の手法を取り入れ、ヒューマンケア、コミュニケーションやプロフェッショナリズムについても考えられるようになる。 (3)修得できる能力:①知識・理解、③態度・志向性 (4)授業の到達目標:緩和医療の意義を理解し、薬剤師および管理栄養士としてチーム医療における個々の患者に合わせた緩和医療の実践に貢献できる知識や態度を修得する。DP④ (5)実務経験と授業内容との関連:担当教員の講義は病院薬剤師としての実務経験を踏まえた授業です。
準備学習等の指示	授業開始前には必ず講義スケジュールにより当日の授業内容を予習し、授業終了後には必ず参考文献等により、当日の授業内容を復習してください。
講義スケジュール	1. 緩和ケア総論-1(導入)・緩和ケア総論-2 緩和ケアとは(定義)、課題、展望、人としての関わり方などについて説明できる。 死を正しく理解し、生と死について考えられる。 2. 全人的ケア 全人的ケアの定義、事例を説明できる。 3. 痛みの理解とアセスメント 痛みの分類、機序、評価などを説明できる。 4. 痛みのマネジメント-1 WHO方式がん疼痛治療法を理解し、説明できる。 オピオイド-1:オピオイドの作用機序、効果、副作用への対応などを説明できる。 5. 痛みのマネジメント-2 オピオイド-2:各オピオイドの臨床的特徴について説明できる。 6. 痛みのマネジメント-3 非オピオイド鎮痛薬(アセトアミノフェン、NSAIDs)の特徴と使い方などを説明できる。 7. 痛みのマネジメント-4 鎮痛補助薬について、種類と使い方などを理解し、説明できる。 8. 痛み以外の症状マネジメント-1 消化器症状(吐気・嘔吐、便秘、食欲不振など)や呼吸器症状(呼吸困難など)を理解し、対応できる。 9. 痛み以外の症状マネジメント-2 骨転移痛、抑うつ、せん妄などへの対応できる。 終末期の食事・栄養管理、その他の症状を説明できる。 10. コミュニケーション 患者・家族の気持ちを理解できる。相手の特性を掴みられる。 11. 症例を通して専門職連携実践(IPW)を考える 薬剤師、管理栄養士の役割、専門職種連携、IPW論などを説明できる。 12. IPW演習・緩和医療学(専門職連携実践:Interprofessional Work)-チーム医療を学ぶ-1<彩の国連携科目>埼玉県立大学、埼玉医科大学、日本工業大学の学生との合同演習(症例検討、支援計画の作成)に参画し、プロダクトを作成できる。 13. IPW演習・緩和医療学(専門職連携実践:Interprofessional Work)-チーム医療を学ぶ-2<彩の国連携科目>埼玉県立大学、埼玉医科大学、日本工業大学の学生との合同演習(症例検討、支援計画の作成)に参画し、プロダクトを作成できる。
教科書	大学病院の緩和ケアを考える会編著・物語で学ぶ緩和ケア みんなでめざすチーム医療、2021年、へるす出版
参考文献	茅根義和、細谷 治編著、臨床医のくすり箱 医療用麻薬、2011、南山堂 日本緩和医療薬学会編集、緩和医療薬学、2013、南江堂 茅根義和他、チャレンジ・在宅がん緩和ケア、改訂2版、南山堂

授業の方法	講義(グループワークや症例カンファレンスなどを含むインターラクティブな授業)、IPW演習(SGD)
成績評価方法	試験90%、講義時の態度10%(質疑応答やSGD時の言動をルーブリック評価・初回授業時に提示)
オフィスアワー	講義日の講義終了後(15:30～16:30)
居室	細谷(21号館4階薬剤学研究室・講義日のみ)
ホームページ	
その他特記事項	1. SBOsの記載がない本科目は、本学独自の教科科目です。 2. 授業はインタラクティブに行います。がんの終末期、死、緩和医療などに光を当てます。また、最新の教育手法IPW演習や外部講師による講義も取り入れ、緩和ケアについて自ら考える力を身につけることを目指します。
添付ファイル	